
僕たちは赤い水を食べた

連

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕たちは赤い水を食べた

【Nコード】

N7091Q

【作者名】

連

【あらすじ】

水族館は別の世界だった。そこであるものを知った。少年たちの心は何かを覚えた。それは暴走するような水だった。

餌が放り込まれた瞬間、僕たちは大騒ぎした。それは水の中で大きなうねりになり、その光景は目に強く焼きついた。

無邪気にはしゃぐ子供たちが水族館に行きたいと言い出した時、僕は迷った。水族館はたぶん今日も賑わっているだろう。僕は何度か日曜日に地元の水族館の前を通ったことがある。そして、通るたびにそこを通り過ぎてゆく。

「パパ。連れてって、連れてって」

小学校低学年の目には魚は魅力的だろう。水の中を泳ぐ。それだけで僕たちも興奮したから。

あれは小学二年の秋だった。その日、学校は遠足だった。遠足といっても近所の水族館だったけど、小さかった僕たちにはその建物を見るだけでも刺激的だった。

「ピラニアの餌やりショーが見れるらしいぞ」

友達のケンちゃんが言い出した。

「ほんとかよ」

やんちゃだった僕たち男子は二時から始まるという餌やりショーを固まって楽しみにしていた。

ケンちゃんの家は鑑賞用の魚を売る商売をしていて、「ピラニア」なるものに詳しかった。僕たちはその凶暴な「ピラニア」がどんなものかを前もって聞かされていた。

あの秋はまだ夏の暑さを引きずっていたのを覚えている。そして僕たちは悠々と泳ぐ魚、魚、魚に囲まれた。世界が違うようだった。ここは日本なのかなと少し錯覚を覚えた。

水は水色と透明の中間のような色をしていて、その中で泳ぐ魚が不思議でしやうがなかった。

「どうしてケンカせずにやっていけるのかな」

魚は皆、仲良しに思えた。魚は魚を避けて泳ぐ。その避け方が面白くって僕はじっと見つめた。そんな僕をケンちゃんが「何じーっとしてんだよ」と言っつて、頭をはたき逃げていった。僕は「コノヤロ」と叫んで追いかけたが、すぐに二人とも先生に怒られた。

そんな様子を川村は見ていた。川村はクラス一のブサイクで嫌われている女子だった。僕たち男子の悪口をいつも言っているし、僕も何度か「近寄らないで」と言われたことがある。

そんな僕たちを見るなり、川村は「バカがまたなんかやってる」と冷めた目で見えるのだった。川村の周りにいた、川村の次ぐらいに性格の悪い女子たちも僕たちを見て笑っていた。僕らは「うるせーよ」と言っつてそばから離れた。

「早く始まんねーかな、ピラニヤシヨ」

ハヤトが言い出した。ハヤトはグループの中で一番背が高い奴だ。「俺だつてうずうずしてんだよ」

弁当を広場で食べた後、男子はピラニヤのことで鼓動を速めていった。獰猛なピラニヤ。男子の血が騒がないわけがなかった。

先生が僕たちを集めた。二時になった。

「餌やりシヨ」が始まるよ」

いつもはちゃんと整列したりしない僕たちでも、この時ばかりはすぐに集まったので先生も苦笑いしていた。若い女の先生だった。

ピラニヤはゆったりと泳いでいた。他の魚と同じようにケンカもしていなかった。それがケンちゃんの言うとおりに暴れだすのかな。僕たちは水槽にへばりついた。牙があつた。少し怖かった。

「ただ今より、ピラニヤの餌やりシヨ」を始めます。皆さん、よく見ていてくださいね」

アナウンスが流れた。その瞬間だった。餌が落ちた。なんの餌かも分からなかった。水面が暴れだした。すごい勢いで暴れだした。それは一瞬だった。ピラニヤが一箇所に群がった。餌はあつという間に消えてしまった。

「川村すつげえ腹立つ」

休み時間にケンちゃんの一番の親友、モリヒロが言い出した。足を踏まれたらしい。

「俺もう我慢の限界」

モリヒロは皆がもたれていた壁を蹴った。一番腹が立ったのはケンちゃんだった。黙っていたが顔つきが明らかに変わっていた。

誰かが言った。

「ピラニヤごっこ、やんない？」

下を向いていたハヤトだった。

「ピラニヤごっこって何？」

僕は昨日のピラニヤの残像を頭の中で見ていた。激しく暴れだす特殊な魚。僕たちはかつこ良さを感じていたのかもしれない。

「ピラニヤごっこってというのはあ……」

僕たち四人は頭を近づけてその遊びを話し合った。

放課後、僕たちは川村を呼び出した。学校の裏にある動物ランドだった。そこではうさぎと鶏を飼っていて、その動物の匂いがツンと鼻を突いた。

「グゲツ」

鶏が鳴いた。僕たちは川村を囲んだ。

「何？」

いつも見ている川村の顔は、その日一層醜く見えた。赤い服が似合っていないかった。

「何ってなあゝ」

「そうそう」

顔を見合わせた。もう足は動く用意が来ている。

「帰りたいんだけど。誰か告白すんなら待ってあげるわよ。あ、そこかあ。案外勇気ないんだ。もしかして全員私が好きだったりして」
その瞬間、僕たちは川村にかかっていた。腕に、足に噛み付き

た。食いちぎるくらい強く噛み付いた。手加減はしなかった。

「ぎゃあー!!」

川村の悲鳴で動物が一斉に鳴きだした。

あの日から川村は学校に来なくなった。僕たちは黙り込んだ。しようがなかった。腹が立っていた。誰一人として、誰かを責めることはなかった。でも皆が川村のことばかり考えていた。

「パパ。やっぱりだめなの？」

息子たちの顔が近づいてきた。魚、魚とはしゃいでいる。

「魚なんか面白くないよ？」

僕は言ってみた。それでも息子たちは僕にねだってきた。洗濯物を干し終えた妻が「いいじゃないの、水族館行きたいよね」と笑顔で息子たちの頭を撫でた。

「だから行きましょうよ、水族館。今日行こうよ、ね」

腰が重いを感じる。息子に引っ張られる手。僕は机の上に目をやった。

「タバコだけ持ってくわ」

箱に指をかける。

「吸えるところないわよ、そんなの」

妻はそう言っただけで、「ま、持って行くだけ」と小声で返して立ち上がるとした。その瞬間にあの夏の残りの暖かさが蘇ってきて、僕は歯をギリと噛み締めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7091q/>

僕たちは赤い水を食べた

2011年2月7日08時25分発行